報道発表

文化庁
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

平成２６年３月１３日

平成２５年度（第６４回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定について

文化庁では，昭和２５年から毎年度，芸術各分野において，優れた業績を挙げた方，又は新生面を開いた方に対して，芸術選奨文部科学大臣賞，同新人賞を贈っています。このたび，本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

１．趣旨

芸術各分野において，優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し，芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞を贈ることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

２．部門・贈賞

演劇，映画，音楽，舞踊，文学，美術，放送，大衆芸能，芸術振興，評論等，メディア芸術の１１部門にて実施。受賞者には賞状と，大臣賞には３０万円，新人賞には２０万円の賞金が贈られます。

３．贈呈式

３月１９日（水）午後４時から，都市センターホテル（東京都千代田区平河町２－４－１）において行います。

※取材を希望される場合には，事前登録をお願いします。下記の担当まで御連絡ください。

＜担当＞文化庁文化部芸術文化課文化活動振興室
芸術文化課長　舟橋　徹（内線 2822）
活動奨励係長　市橋　義史（内線 2832）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-2835（夜間直通）

平成25年度（第64回）芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：18名　文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	吉田（よしだ）　和生（かずお）	文楽人形遣い	通し狂言「伊賀越道中双六（いがごえどうちゅうすごろく）」お谷ほかの成果
		吉田（よしだ）　鋼太郎（こうたろう）	俳優	「ヘンリー四世」におけるフォルスタッフの演技
	新人賞	森（もり）　新太郎（しんたろう）	演出家	「エドワード二世」ほかの演出
映画	大臣賞	是枝（これえだ）　裕和（ひろかず）	映画監督	「そして父になる」の成果
		鈴木（すずき）　敏夫（としお）	プロデューサー	「風立ちぬ」「かぐや姫の物語」の製作
	新人賞	石井（いしい）　裕也（ゆうや）	映画監督	「舟を編む」の成果
音楽	大臣賞	清元（きよもと）　美治郎（よしじろう）	清元節三味線方	「幻惑（まぼろしわんきゅう）久（みえがすみ）」「三重霞（かいらいし）傀儡師」ほかの演奏
		藤井（ふじい）　泰和（ひろかず）	地歌・箏曲（そうきょく）演奏家	「第19回 藤井泰和 地歌演奏会」ほかの成果
	新人賞	小菅（こすげ）　優（ゆう）	ピアニスト	「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全曲演奏会シリーズ」ほかの成果
舞踊	大臣賞	笠井（かさい）　叡（あきら）	舞踊家	「日本国憲法を踊る」ほかの成果
	新人賞	猿若（さるわか）　清三郎（せいざぶろう）	日本舞踊家	「かしく道成寺（どうじょうじ）」の成果
文学	大臣賞	玄侑（げんゆう）　宗久（そうきゅう）	作家	「光の山」の成果
		澤（さわ）　好摩（こうま）	俳人	「句集 光源」の成果
	新人賞	藤島（ふじしま）　秀憲（ひでのり）	歌人	「歌集 すずめ」の成果
美術	大臣賞	大竹（おおたけ）　伸朗（しんろう）	美術家	「大竹伸朗展　ニューニュー」ほかの成果
		福田（ふくだ）　美蘭（みらん）	画家	「福田美蘭展」の成果
	新人賞	米田（よねだ）　知子（ともこ）	写真家	「米田知子　暗（やみ）なきところで逢（あ）えれば」展の成果
放送	大臣賞	水田（みずた）　伸生（のぶお）	ディレクター	「Woman」の演出
	新人賞	吉崎（よしざき）　健（たけし）	ディレクター	「日本人は何をめざしてきたのか　第2回 水俣～戦後復興から公害へ～」の成果
大衆芸能	大臣賞	小曽根（おぞね）　真（まこと）	ジャズピアニスト	CD「TIME THREAD」ほかの成果
		五街道（ごかいどう）　雲助（くもすけ）	落語家	「第543回 落語研究会」における「お初徳兵衛（はつとくべえ）」ほかの成果
	新人賞	水樹（みずき）　奈々（なな）	声優・歌手	「NANA MIZUKI LIVE CIRCUS 2013」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	橋本（はしもと）　隆雄（たかお）	大道芸プロデューサー	「ひたち国際大道芸」の成果
	新人賞	五十嵐（いがらし）　太郎（たろう）	建築批評・建築史家	「あいちトリエンナーレ2013 揺れる大地」ほかの成果
評論等	大臣賞	大笹（おおざさ）　吉雄（よしお）	演劇評論家	「最後の岸田國士（くにお）論」の成果
		四方田（よもた）　犬彦（いぬひこ）	映像・比較文化研究家	「ルイス・ブニュエル」の成果
	新人賞	佐藤（さとう）　志乃（しの）	公益財団法人横山大観記念館学芸員	「『朦朧（もうろう）』の時代―大観、春草らと近代日本画の成立」の成果
メディア芸術	大臣賞	諸星（もろほし）　大二郎（だいじろう）	漫画家	「瓜子姫（うりこひめ）の夜・シンデレラの朝」ほかの成果
	新人賞	中村（なかむら）　勇吾（ゆうご）	インターフェースデザイナー	TV番組「デザインあ」ほかの成果

※敬称略・部門内50音順・受賞者名の下線は女性

平成25年度（第64回）芸術選奨
文部科学大臣賞　贈賞理由

平成25年度（第64回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	吉田　和生	本年，吉田和生氏が遣った人形は極めて卓抜しており，その精髄は東京と大阪で上演された通し狂言「伊賀越道中双六」お谷において端的に示された。殊に，内なる激情を秘め雪中に堪え，苦悩する「岡崎雪降(おかざきゆきふり)」の場は，胴串(どぐし)をしかと支えたまま余計な動きを封ずる至難の方法に徹し，熾烈(しれつ)なまでに大夫・三味線の演奏と対峙(たいじ)した。同演目の立役・十兵衛で見せた腹芸の深さ。復曲「大塔宮曦鎧(おおとうのみやあさひのよろい)」花園で見せた格調と複雑な心理。いずれも派手な外面性を拒み，作品を読み込んだ深い内部観照に基づく。現代最高峰の人形遣いの一人として心からの称賛に値する成果である。
演劇	吉田　鋼太郎	吉田鋼太郎氏は，爆発的な生命力に満ちた愛嬌(あいきょう)あふれる演技によって，多数あるシェイクスピアの登場人物の中でも特に表象の難しいフォルスタッフを見事に具現化して観客を魅了した。それは長年シェイクスピア上演に携わってきた氏の実践的な深い理解の賜物(たまもの)でもあろう。シェイクスピアの陰陽交えた道化的喜劇性を巧みに表現したその演技は，世界的にもシェイクスピア上演史に一つの重要な道標を刻むものである。
映画	是枝　裕和	是枝裕和氏は長編劇映画デビュー作「幻の光」で国内外から高い評価を受け，「誰も知らない」でドキュメンタリー出身ならではの独自の演出手法を確立し，世界の映画シーンでその新作が強く期待される監督の一人となった。その後，ドラマ性の高い企画で演出の幅を広げ，「そして父になる」で新たな高みに到達した。氏は常に現代社会の重いテーマを取り上げながら，普遍性の高い解釈で幅広い観客の関心を集め，大きな結果を残してきたことでも，現在の映画界では稀有(けう)な存在として評価される。
映画	鈴木　敏夫	鈴木敏夫氏はスタジオジブリのプロデューサーとして，長きにわたり上質で娯楽性の高いアニメーション映画を製作してきた。世界中に日本アニメ映画のすばらしさを伝えた功績は計り知れない。平成25年公開の宮崎駿(はやお)監督の「風立ちぬ」，高畑勲(いさお)監督の「かぐや姫の物語」では，デジタル時代におけるアナログ手法の追求を実現せしめ，これからのアニメーション映画の可能性を切り開き，映画プロデューサーとして歴史的業績を残した。
音楽	清元　美治郎	清元美治郎氏は，歌舞伎・日本舞踊の世界において，卓越した技とセンスの持ち主として多方面から信頼を集めているが，昨年は素の演奏で注目すべき活動が目立った。中でも清元美寿太夫(よしじゅだゆう)との「二人会」では，絶妙な間合いと抒情性(じょじょうせい)に富んだ音色，融通無碍(ゆうずうむげ)な撥(ばち)さばきで聴衆を圧倒。殊に「幻椀久」は，素の舞台に幻想的な椀久の世界を現出させる名演だった。さらに，長唄との掛合曲(かけあいきょく)として，自ら清元パートを復曲した「三重霞傀儡師」（本名題「三重霞嬉敷顔鳥(みえがすみうれしきかおどり)」）では，緊密かつ柔軟なバランス感に満ちた演奏で掛合の魅力を現代によみがえらせた。これらの成果は清元にのみとどまらず，三味線音楽そのものの可能性に期待を抱かせるものと言え，高く評価できる。
音楽	藤井　泰和	九州系地歌を伝承する藤井泰和氏は，箏・三弦の確かな技量と芯の通った男声を生かし，繊細な情緒を漂わせて作品の魅力を表現できる演奏家である。本年は，難曲の「融(とおる)」と「三津山(みつやま)」に挑戦した「第19回　藤井泰和地歌演奏会」，全国各地で行った「地歌の会」など，自らの企画公演における充実した成果に加え，助演者としての活躍にも輝きがあった。古典の伝統に堅実に向き合う氏の姿勢は，日本文化を後世に伝える担い手としての今後の活躍に大きな期待を抱かせるものである。

平成25年度（第64回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	笠井　叡	日本のオリジナルな舞踊である「舞踏」の第一世代として，笠井叡氏は確固たる地位を築きながら常に挑戦を続けてきた。本年も多様な活動を行う一方で，集大成として「日本国憲法を踊る」を上演した。戦中に生まれ戦後を歩んできた人生，早世した裁判官の父への思いなど個人の歴史が，古事記，フランス人権宣言，明治憲法等から現行憲法へと連なる人間と言葉の壮大な歴史によって照射され，氏のカラダと踊りに凝縮された。カラダによって思考する舞踊家の鬼気迫る踊りと，そこから生まれたスケールの大きな作品が高く評価される。
文学	玄侑　宗久	短編集「光の山」は，稀有な小説である。福島の寺の住職を務めつつ小説を書いてきた玄侑宗久氏が，東日本大震災を経験し，僧侶として鎮魂のために奔走し，被災地の様々な声を発信する日々の中から，滴るようににじみ出てきた作品である。苦汁に満ちていながら，どこか遠くの美しい場所から差す不思議な光に満たされたように感じられる読後の印象は，正に本作の題名どおりだ。今という時間，震災後の福島という場所の真実を，シンプルでいながら取替えの利かない言葉で端的に表現し得たことは，非常に意義深い。
文学	澤　好摩	澤好摩氏は長年同人誌を拠点に静かな，かつ確かな存在感を示し続けてきた。伝統を踏襲する姿勢とは一線を画し，新興俳句と前衛俳句の流れを汲(く)む作風は，ここへ来て伝統でも前衛でもない，誰も踏み込んだことのない境地へ突き抜けたようだ。「うららかや崖をこぼるる崖自身」「百韻に似し百峰や百日紅(さるすべり)」「うたたねの畳の縁を来る夜汽車」「凭(もた)るるは柱がよけれ妹よ」などに見えるように，韻律はときにしなやか，ときに重厚。言葉も，あるときは巌(いわお)のごとく，またあるときはあえかな光を纏(まと)う優しさを見せる。韻文性に優れ，重量感がありながら，自在。さらに，シャープな現代性と抒情性をも併せ持つ本書は，俳句形式の最も美しい結晶の一つと言えるだろう。
美術	大竹　伸朗	大竹伸朗氏は，絵画，立体，コラージュ，写真，パフォーマンス等の多彩な領域にわたる作品群で注目されてきたが，平成25年には創作活動の集大成とも言える展観が国内外4か所において実施された。丸亀市猪熊弦一郎(いのくまげんいちろう)現代美術館では新作と国内未発表インスタレーション作品，高松市美術館においては回顧展，瀬戸内国際芸術祭には島の環境を受け継ぎつつ挑んだ新作設置，第55回ヴェネチア・ビエンナーレ企画展には氏の思索と表現の積層を成すとも言える「スクラップブック」が出品され強い存在感を示した。宇和島に在住する氏の，国際的な注目を集めるに至る全ての作家活動が礎となっての贈賞である。
美術	福田　美蘭	福田美蘭氏は，若くして安井賞を受賞して以来，独自のスタイルを切り開き続けた画家である。それは美術の固定観念を覆すという一貫した姿勢に貫かれているが，近年では古今東西の名画を基にしながらも，単なるパロディーではなく，美術そのものの成り立ちを問い直す作風を確立した。今回の個展は，同時多発テロや東日本大震災など現代の様々な出来事を題材にした多くの新作を含み，「時代を映す鏡でありたい」との氏の言葉どおりの充実したものであり，今後の更なる展開を予感させるものであった。
放送	水田　伸生	ドラマ「Woman」の脚本は，完成度の高さはもちろん，それにもまして演出が非常に困難なシナリオだ。それに真っ向勝負を挑み最高傑作にまで昇華させた水田伸生氏の演出は賞讃(しょうさん)されるべきものだ。俳優に潜在する演技力を極限まで引き出し，その映像の切取りから編集等に至るまで，非常に繊細かつ自然体であり，あたかもドキュメンタリーのように見るものをその世界に引き込む。「演出とは何か」の問い掛けに見事に応える氏の「技」がそこにある。

平成25年度（第64回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	小曽根　真	平成25年は小曽根真氏にとって最良のメモリアル・イヤーだった。日本人初の米CBSデビューから30年。師でもあるゲイリー・バートンとのワールド・ツアーから30年。そのバートンとのデュオCDと演奏会が大きな話題となった。さらに，特筆すべきはジャズとクラシックとの間を軽快に往来し，カテゴリーの壁をいとも楽しげにくぐり抜けて音楽への愛をアピールしたこと。中でもパキート・デリヴェラを招いて共演したモーツァルトの「クラリネット協奏曲」とラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」のソロは圧巻だった。氏のクラシック演奏にはビートと歓喜がある。現代屈指のジャンル越えのマジシャンとして高く評価したい。
大衆芸能	五街道　雲助	五街道雲助氏の「第543回落語研究会」における“人情噺(にんじょうばなし)”の発端「お初徳兵衛」の好演に，たゆまぬ研鑽(けんさん)の実りが見えた。このほか，自ら発案した「柳噺研究会」では五代目小さん十八番の“落とし噺”，先年芸術祭賞を受賞した芝居掛かりの演出，伝統的な落語のくくりに加えて，圓朝(えんちょう)作品など続き物を“世話噺”と命名し，熟成し演じ分け続けている。本年度はこれらを逐次演じる「らくご街道 雲助五拾三次(ごじゅうさんつぎ)」の企画も意義があった。
芸術振興	橋本　隆雄	橋本隆雄氏は，昭和61年の「野毛(のげ)大道芸」以来，地域と結び付いた個性ある大道芸フェスティバルを全国各地でプロデュース，併せてアーティストにライセンスを発行して活動場所を提供する「ヘブンアーティスト事業」（東京都）の創設や若いアーティストたちの海外派遣に尽力するなど，我が国大道芸の質的向上と芸術としての認知に多大な功績を重ねてきた。平成25年度開催の「ひたち国際大道芸（第22回）」では，長年にわたる地域活性化の実績に加えて，過去最大の38組のアーティストが参加する内容の充実を示した。
評論等	大笹　吉雄	大笹吉雄氏は近代から現代にわたる日本演劇史の研究で大きな業績を挙げてきたが，「最後の岸田國士論」は，これまでの研究を踏まえながら，戦前から戦後にかけて劇作家，小説家，演出家として日本文化に大きな足跡を残した岸田國士の人生を，「国際結婚とその落とし児(ご)たち」「軍人であること」「演劇革新」という岸田が抱え続けた三つの視点から論じた著作で，文化の違いを越える相互理解，時代の流れの中での国家と個人との葛藤，演劇の本質とは何かを岸田の著作を通して問い掛けた優れた評論である。
評論等	四方田　犬彦	ブニュエルは一筋縄では捉えきれない「映画史における一つの巨大な矛盾」だ。四方田犬彦氏はその謎を数十年にわたり追求。文献を渉猟し，出生地まで赴き＜悪夢の映画作家＞の総体を多層的に描き出す。映画，文学，宗教，漫画，比較文化等，世界を横断し，幅広い分野でのこれまでの活動は，この大著への到達のためにあったとさえ言える。今後更なる発展を期待する。
メディア芸術	諸星　大二郎	諸星大二郎氏の「瓜子姫の夜・シンデレラの朝」は，グリム童話，日本民話，「聊斎志異(りょうさいしい)」（中国清代の怪異小説集）からの話をベースに独自にアレンジされた物語を描き出している。怪奇的ではありながらも心温まる一面もあり完成度が極めて高い。これまでの多くの作品で描かれてきた伝奇的，民俗学的内容を基にした人間の心の暗黒面への関心は抑えられ，よりポジティブに心がくつろげるような一面を示し，一つの到達点を示すものとして高く評価できる。

平成25年度（第64回）芸術選奨
文部科学大臣新人賞　贈賞理由

平成25年度（第64回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	森　新太郎	森新太郎氏が演出し上演された劇団昴(すばる)公演・サルトル作「汚れた手」は，劇団民藝(みんげい)が半世紀前に上演した古典的な実存主義的政治劇を現代によみがえらせた。同じく氏の演出による新国立劇場公演・マーロウ作「エドワード二世」もエリザベス朝時代に14世紀の国王を風刺した古典劇を現代劇として表現した。「汚れた手」も「エドワード二世」も今は上演される機会の少ない作品だが，氏は舞台美術，照明を生かした演出により，現代の観客の前に普遍的な作品として新たに提示した。
映画	石井　裕也	柔らかな厚みと軽やかな風格。石井裕也氏の監督による「舟を編む」は，三浦しをんのベストセラーの映画化で，15年余りの歳月を掛けて辞書作りをする人たちの話である。当然，場面はほとんど室内で，動きも少ない。だが，氏は言葉と格闘する不器用な主人公の言動に，さりげないユーモアとサスペンスを盛り込み，動きのない場面でも言葉と感情が静かに渦を巻く。見る者に心地良い達成感をもたらすその演出力は，正に日本映画界の次期エースとして期待大である。
音楽	小菅　　優	小菅優氏は既にある程度のキャリアを持ち，活動も幅広いが，紀尾井ホール及びいずみホールで行っているベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会では，優れた造形力と豊かで強靱(きょうじん)な表現力を示し，一連の作品に日本人として清新な局面を切り開いている。連動して行われている録音も優れた成果として評価できる。また，ヘンツェのピアノ協奏曲のような現代作品に挑むなど，新たな活動への意欲も見せており，今後への期待も大きい。
舞踊	猿若　清三郎	「かしく道成寺」は，歌舞伎「京鹿子娘道成寺(きょうがのこむすめどうじょうじ)」になぞらえて，若い吉原芸者が育っていく様を組歌形式にした曲（流祖猿若清方作詞，大和久満作曲，昭和49年7月「猿若会」）で，女流の猿若吉代が初演した名品である。猿若清三郎氏は女流が描く芸者を探求して，歌舞伎女形にはない，清新で溌剌(はつらつ)とした女形の表現で描き，新しい舞踊の境地を示した。研究熱心な姿勢は，今後の舞踊界での活躍が大いに期待できる。
文学	藤島　秀憲	藤島秀憲氏の第二歌集「すずめ」は，現代歌人協会賞を受賞した第一歌集「二丁目通信」の世界を更に進め，日常生活の折々を，平明な用語で淡々と表現しつつ，ペーソスとそこはかとないユーモアの中に人生の味わいを感じさせる。脳梗塞の父を介護する歌，そしてその父が亡くなった後の虚脱感。淡々とした歌い口の中に笑いと深い悲哀の交錯する表現が斬新で，現代短歌の成果として高い評価を得た。
美術	米田　知子	米田知子氏の主題は，一貫して歴史的な遺物や現場の写真映像を通じて，その場所に降り積もる目には見えない歴史的記憶を可視化することにある。個展「米田知子 暗なきところで逢えれば」は，初期作から東日本大震災をきっかけに生まれた「積雲」や旧・南樺太(からふと)に取材した「サハリン島」など最新シリーズに及ぶものであったが，徹底した現場主義と，同じくらい徹底した視覚主義の結合が，写真による歴史へのアプローチのための強力な手段となり得ることを見事に示した。

平成25年度（第64回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	吉崎　健	吉崎健氏は，ディレクターとして「花を奉る　石牟礼(いしむれ)道子の世界」「原田正純 水俣 未来への遺産」など，20年以上にわたり水俣病問題を見詰め伝え続けてきた。「日本人は何をめざしてきたのか 第2回 水俣～戦後復興から公害へ～」では，企業城下町水俣の戦後から今に至る軌跡を，多角的な証言で構成し，日本の戦後史を水俣病という視点から描き，東日本大震災以降の現代社会を新たに問い直す優れたドキュメンタリーとして完成させた。その継続する志を高く評価する。
大衆芸能	水樹　奈々	将来，日本の“声優史”を振り返った場合，水樹奈々氏を境に時代がくっきりと分かれたことに気付くだろう。声優をめぐることごとくを変えた，それほどまでに画期的な存在である。声優として活躍する一方，アニメソングを広く一般に浸透させ，歌手としてドーム球場を満員にするほどの人気を示し，海外公演も成功させた。クールジャパンのコンテンツの一つとしてアニメの輸出が盛んだが，国内での人気の高まりがなければ，そうはならなかった。氏は“切り開く者”として，その一端を担った。
芸術振興	五十嵐　太郎	五十嵐太郎氏は，「あいちトリエンナーレ2013　揺れる大地―われわれはどこに立っているのか：場所，記憶，そして復活」の芸術監督を務め，平成23年の東日本大震災と福島第一原発事故に関する，多様な領域・傾向・角度の表現を，美術館内・外，名古屋・岡崎両市を横断して結集し，諸世代の市民たちの参加の下に，震災に関わる芸術的な経験の場として出現させた。それは，美術国際展の中に建築を深く結び付けた点でも高く評価され，世界各地を巡回中の「3.11－東日本大震災の直後，建築家はどう対応したか」展監修など，建築の専門家としての氏自身の震災以降の優れた活動にも連動している。
評論等	佐藤　志乃	近代日本画の革新は横山大観や菱田(ひしだ)春草の「朦朧体」抜きには考えられない。佐藤志乃氏はこの「朦朧体」を，絵画運動のみならず当時の幅広い文化の中に置き直し，その意味の多様性と広がりを時代相とともに鮮やかに浮き彫りにしてみせた。しかも，岡倉天心の導きで「朦朧体」絵画がインドや欧米にも波及していく様を追跡するなど，グローバルな視野も備えている。近代日本画研究を進展させる優れた著作として高く評価したい。
メディア芸術	中村　勇吾	中村勇吾氏は，これまでのテレビ映像の制作方法とは異なる新たな手法を用い，これまでに例を見ない子供のためのデザイン教育番組「デザインあ」を開発した。この「デザインあ」は，番組制作のみにとどまることなくイベント展開など多方向へ展開し，国内外のデザイン賞を多数受賞するなど日本のデザイン教育に新しい視点を与えた。また，子供の感性を豊かにするこのメディアデザインは，教育番組のみならず，これからの世界のデザイン教育に大きな指針を示したものと言える。

平成25年度（第64回）芸術選奨
選考経過

平成25年度（第64回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	今年度は選考審査員，推薦委員から文部科学大臣賞候補として16名，文部科学大臣新人賞候補として12名が推挙された。古典芸能・現代の両ジャンルとも演技者が多く推薦されてきたのが特徴である。第一次選考審査会では，対象となる個別の作品の実績について評価と反論などが活発に行われ，文部科学大臣賞候補として古典芸能から2名，現代劇から2名，文部科学大臣新人賞候補としては古典芸能2名，現代劇から1名を対象として残すこととなった。 第二次選考審査会では文部科学大臣賞候補としてまず，古典芸能の2名の活動実績について改めて評価が行われ，人形浄瑠璃(じょうるり)文楽の吉田和生氏の昨年1年の技芸の質の高さを称賛する声が高まり，次いで，シェイクスピア作品の登場人物のうち，特に難役とされる「ヘンリー四世」のフォルスタッフを見事に演じた俳優・吉田鋼太郎氏の演技が評価され，両名の文部科学大臣賞受賞が異論なく決定した。文部科学大臣新人賞については英国エリザベス朝時代のクリストファー・マーロウの長尺の作品「エドワード二世」ほかを見事なさばきで舞台に上げた演出家・森新太郎氏の実績と将来性に期待して受賞が決まった。
映画	本年度，映画部門において選考審査員及び推薦委員から推薦された候補者は，文部科学大臣賞候補として7名，文部科学大臣新人賞候補として12名であった。第一次選考審査会においては，まず文部科学大臣賞候補の7名について，選考審査員が自身の推薦する候補者の業績，推薦理由について述べ，他の審査員からの応援意見，反論，質問により論議された。また，推薦委員からのみ推薦の候補者については，その業績，推薦理由が事務局から読み上げられ，同様の論議が行われた。論議を尽くした上で，評価の集まった3名が選ばれた。同様の選考で，文部科学大臣新人賞は4名に絞られた。 第二次選考審査会では，候補者の業績について更に精細に吟味され，文部科学大臣賞には，「そして父になる」を高い芸術性と見事な演出力で描いた是枝裕和氏と，「風立ちぬ」と「かぐや姫の物語」を製作，これまでのジブリ作品プロデュースの功績も併せて鈴木敏夫氏への贈賞が決まった。また，文部科学大臣新人賞は，「舟を編む」で若いながら落ち着いた力量を発揮した石井裕也氏に決まった。
音楽	音楽部門の選考審査員及び推薦委員から推薦された候補者は，文部科学大臣賞12名，文部科学大臣新人賞13名であった。第一次選考審査会では，選考審査員がそれぞれの推す候補者について推薦理由の骨子を説明し，推薦委員からの分については資料の記載内容を慎重に検討する形で審査を進め，文部科学大臣賞候補として指揮者を含む洋楽関係3名及び邦楽関係3名の計6名を，文部科学大臣新人賞候補として作曲家を含む洋楽関係3名を残した。 第二次選考審査会では，まず文部科学大臣賞候補者について，芸術性，独創性，社会的反響，近年の活動状況等の観点より念入りな検討と討議を行った結果，清元三味線演奏家である清元美治郎氏と地歌・箏曲演奏家である藤井泰和氏の成果について，いずれも高度な完成の域に達しているとの評価を確認し，贈賞決定に至った。次いで文部科学大臣新人賞の選考に移り，活動の成果，独自性，今後の発展の可能性などの観点より慎重に審議した結果，ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会シリーズを中心に高度かつ安定した演奏活動を展開しているピアニストの小菅優氏に贈賞することを全員異議なく決定した。
舞踊	舞踊部門で選考審査員と推薦委員から挙がった候補者は，文部科学大臣賞14名，文部科学大臣新人賞13名であった。内訳は邦舞系8名，洋舞系19名。例年になく洋舞系候補者が目立って多かった。第一次選考審査会では候補者各人について推薦した選考審査員から活動の詳細や推薦理由の説明があり，また推薦委員からの候補者に関しても添付資料を参考にして，慎重に審議を重ねた結果，文部科学大臣賞候補6名，文部科学大臣新人賞候補5名に絞り込んだ。 第二次選考審査会では一次審査での議論を更に深め，活発な意見交換を行った後，慎重な討議を行い，まず文部科学大臣賞で1名を決定，残り1名の枠は本年度該当者なしとの結論を得た。文部科学大臣賞にはこれまでの実績と本年の「シュピール」や「日本国憲法を踊る」でユニークな舞台を展開した舞踊家の笠井叡氏を選んだ。また文部科学大臣新人賞は，男性舞踊家で初めて「かしく道成寺」に挑み，成果を挙げた日本舞踊の猿若清三郎氏が選出された。

平成25年度（第64回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では，選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補として11名，文部科学大臣新人賞の候補として10名が挙げられた。第一次選考審査会では全ての候補者の作品について検討した結果，文部科学大臣賞の候補を6名（小説家2名，俳人2名，歌人1名，詩人1名）に，文部科学大臣新人賞の候補を5名（小説家2名，俳人1名，歌人1名，詩人1名）に絞り込んだ。 第二次選考審査会では，まず文部科学大臣賞の全ての候補作につき選考審査員が順次意見を述べた結果，玄侑宗久氏を推す声が圧倒的に多いことが分かり，同氏が平成23年3月の大震災の経験を結晶させた短編集「光の山」の成果を受賞とすることがまず決まった。詩歌の分野では作風を異にしながら優劣を付け難い候補が複数残ったが，最終的には澤好摩氏が重厚さとシャープな現代性を兼ね備えた作風によってより多くの支持を得た。文部科学大臣新人賞の選考では，小説と短歌の分野からそれぞれ有力な候補が残って意見が割れたが，討議を重ね，平明ながらおかしみと悲哀をたたえた「歌集　すずめ」の著者，藤島秀憲氏を有望な新進歌人として推挙することに決まった。
美術	美術部門の選考審査員，推薦委員から推薦された候補者は，文部科学大臣賞12名，文部科学大臣新人賞15名であった。第一次選考審査会の席上において，候補者の絞り込みを行うため各候補者について慎重な議論を重ね，第二次候補として，文部科学大臣賞6名，文部科学大臣新人賞5名を選出した。 第二次選考審査会では，いずれも活発な活動と優れた作品を発表してきた作家たちについての，細やかな議論が進められた。文部科学大臣賞候補については，ジャンルについての忌憚(きたん)ない意見を含め真摯な討論が交わされた。その結果，現代美術の分野で活躍の目覚ましい，大竹伸朗氏，福田美蘭氏の両氏が選出された。とりわけ平成25年の大竹伸朗氏の活動は，国内外の美術館等4か所にわたるもので，氏の長年の作家生活においても画期的なものである。福田美蘭氏は，完成度が高く批評精神に富む作品発表となった個展に評価が集中した。文部科学大臣新人賞についても，様々な意見が交わされ，絞り込み作業を行った結果，独自の世界観に立つ写真作品を発表した米田知子氏が多数の審査員の支持を受けて選出された。
放送	放送部門では，選考審査員と推薦委員によって，文部科学大臣賞13名，文部科学大臣新人賞7名が推された。ジャンルはドキュメンタリー及びドラマの演出家，プロデューサー，脚本家，俳優と多岐にわたり，第一次選考審査会では活発な討議がなされた。結果，文部科学大臣賞，文部科学大臣新人賞ともに5名の候補に絞られ，全審査員が再度それぞれの作品を見直し，第二次選考審査会に進んだ。 第二次選考審査会では，ドキュメンタリー，ドラマ，俳優の評価基準が並列に考えにくく，各分野で推挙する意見もあったが，昨今のドラマが物語性を重視し，テクニックを偏重する傾向のある中で，飽くまで人間にこだわり，本質を見詰めようとする視点と，言葉に余白と深みを与える演出姿勢を評価して，全員一致で水田伸生氏が文部科学大臣賞に選出された。文部科学大臣新人賞では，水俣病を戦後史の中で捉え，日本という国の在りようと，現代に敷衍(ふえん)する問題意識に，圧倒されるほどの執念を感じ，吉崎健氏をこれまた全員が推挙した。テレビ文化の底力を見た結果となった。
大衆芸能	第一次選考審査会では文部科学大臣賞において選考審査員から6名，推薦委員から6名（グループ）の計12名。文部科学大臣新人賞については選考審査員から8名（グループ），推薦委員から6名の計14名が挙げられた。全ての候補者の討議の結果，文部科学大臣賞は7名に，文部科学大臣新人賞は8名に絞り込まれた。 そして第二次選考審査会では文部科学大臣新人賞がまず決まった。声優・歌手の水樹奈々氏の音楽的あるいはイベントも含めての活動の数々が圧倒的に評価され，「NANA MIZUKI LIVE CIRCUS 2013」ほかの成果が対象となった。文部科学大臣賞は，まず音楽関係から審議が進み，ジャズピアニスト・小曽根真氏のCD「TIME THREAD」ほかの成果に対する評価が高く，まず決まった。演芸関係はジャンルの違う対象者，また東西の担い手たちの評価について突っ込んだ話し合いがなされ，最終的に五街道雲助氏の「第543回 落語研究会」における「お初徳兵衛」ほかの成果に対してがふさわしいとまとまった。流行歌からジャズなど，また落語，漫才，浪曲など贈賞対象候補者が多岐にわたる大衆芸能部門は，それだけに選考審査員各氏の担う責務は大きく，ときに激しい意見の応酬もあったが実りある贈賞者決定と自負している。

平成25年度（第64回）芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	今年度の候補者としては，本部門の選考審査員，他部門の選考審査員及び推薦委員から，文部科学大臣賞候補者8名，文部科学大臣新人賞候補者6名の推薦があった。第一次選考審査会では，全候補者について，推薦理由，業績等が本部門の選考対象として適当かどうかを慎重に審議した。その結果，文部科学大臣賞5名，文部科学大臣新人賞3名に絞り込み（このうち1名は文部科学大臣賞，文部科学大臣新人賞に重複して推薦），更に第二次選考審査会で検討することにした。 第二次選考審査会では，これら8名について，芸術選奨の趣旨及び本部門の対象範囲に即しつつ，前回に引き続いて慎重に審議を行った。その結果，文部科学大臣賞としては，「ひたち国際大道芸」の成果に対し，大道芸プロデューサーの橋本隆雄氏を全員一致で決定した。また，文部科学大臣新人賞としては，「あいちトリエンナーレ2013　揺れる大地」ほかの成果に対し，同トリエンナーレの芸術監督を務めた五十嵐太郎氏を全員一致で決定した。なお，同氏は，前記の文部科学大臣賞，文部科学大臣新人賞に重複して推薦された候補者であったが，今回は文部科学大臣新人賞とすることが適当と判断されたものである。
評論等	評論等部門では，諸芸術に関わる評論等の功績が対象の中心となる。創作者個人に肉薄した作品がある一方で，時代精神や様式の把握に努めたものもあり，選考には骨が折れた。学術的な分析が勝ち過ぎた仕事を，どう評価するか。重要性や斬新ぶりは分かるが，細部の詰めに難のあるものは，どうか。選考基準に，はっきりしたよりどころがある訳では，もとよりない。勢い，選考審査員はそれぞれの価値観をぶつけ合い，白熱した議論が繰り広げられた。優劣は付けづらくもあったが，相互の批評眼がてらわずにぶつけられ，刺激的な時間の分かち合えたことを，選考審査員一同心にかみしめている。 選考の場へは，他部門まで含む選考審査員及び推薦委員から，合わせて文部科学大臣賞23名，文部科学大臣新人賞16名の候補が挙げられた。第一次選考審査会では，そこから文部科学大臣賞候補6名，文部科学大臣新人賞候補6名の著作を選び熟読吟味の対象としている。そして，第二次選考審査会で，大笹吉雄氏の「最後の岸田國士論」と，四方田犬彦氏の「ルイス・ブニュエル」を文部科学大臣賞，佐藤志乃氏の「『朦朧』の時代－大観，春草らと近代日本画の成立」を文部科学大臣新人賞に，それぞれ選出した。
メディア芸術	多様な表現領域に広がるメディア芸術分野では，選考審査員及び推薦委員より選考対象候補として昨年より多い，文部科学大臣賞9名，文部科学大臣新人賞10名の推薦があった。第一次選考審査会では，漫画，メディアアート，アニメーション，インタラクティブデザインなど多岐にわたる作品や活動実績に対し，これまでの業績と将来に向けてのインパクト等を慎重に審議し，文部科学大臣賞3名，文部科学大臣新人賞4名に絞り込んだ。 第二次選考審査会では，新たに得られた情報も踏まえて，メディア芸術分野全体を俯瞰(ふかん)した視点で，候補者それぞれの実績に対して慎重に審議を重ねた。文部科学大臣賞では，昔話，古代史や民俗学を題材にした作品「瓜子姫の夜・シンデレラの朝」など，現代を象徴する世界を描いて読者を引き付けている諸星大二郎氏を選出した。文部科学大臣新人賞では，斬新な映像と音楽で表現する手法により，子供にも大人にも「デザインの面白さ」を伝え，感性を育む番組「デザインあ」の映像監修など，メディアを活(い)かした創造力が高く評価された中村勇吾氏が選出された。

芸 術 選 奨 実 施 要 項

昭和４５年　５月１３日
文　化　庁　長　官　裁　定
一部改正 平成１１年　５月１３日
一部改正 平成１３年　１月　６日
一部改正 平成１５年　４月　１日
一部改正 平成１６年　４月　１日
一部改正 平成１９年１２月２６日
一部改正 平成２４年　４月　１日

１　趣　旨

芸術各分野において，優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し，これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

２　部　門

（１）演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
（２）映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
（３）音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
（４）舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
（５）文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
（６）美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
（７）放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
（８）大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショウ・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
（９）芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
(10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
(11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

３　賞の対象

（１）賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
（２）芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門２名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は１名以内）を原則とする。
（３）芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門１名以内を原則とする。
（４）過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

４　選考の時期及び選考の基準

（１）選考は，毎年，原則として１月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の１月から前年の１２月までの間にあげられたものとする。
（２）選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

５　選考方法

（１）各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
（２）前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
（３）各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
（４）選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸 術 選 奨 実 施 細 則

平成１１年　５月１３日
文　化　庁　次　長　決　裁
一部改正 平成１３年　１月　６日
一部改正 平成１５年　４月　１日
一部改正 平成１６年　４月　１日
一部改正 平成１９年１２月２６日
一部改正 平成２４年　４月　１日

１　選考実績
実施要項４（２）の選考にあたっては，下記のことに留意する。
（１）日本芸術院会員，重要無形文化財（各個認定）保持者，叙勲，紫綬褒章受章者，日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
（２）物故者は対象としない。
（３）受賞者の年齢は，授賞時原則として文部科学大臣賞は７０歳未満，新人賞は５０歳未満とする。
（４）受賞者は，芸術活動を通じて社会に貢献し，国民の模範となり得る者であることとする。

２　選考方法
（１）選考にあたっては，各部門の選考審査員及び推薦委員が，それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし，評論等部門及び芸術振興部門については，他部門の選考審査員及び推薦委員からも，それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
（２）芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは，次のような者をいう。
①新たな芸術分野を創造，または普及させるなど著しい貢献のある者
②複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い，その活動が斯界に大きな影響を与えている者
③他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で，その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され，一定の評価を得ている者

３　実施要項３（３）に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。
（１）活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
（２）今後活躍が大いに期待されること。

平成25年度（第64回）芸術選奨委員一覧【選考審査員】

部門	氏名	肩書	部門	氏名	肩書
演劇	大島幸久	演劇ジャーナリスト	放送	浅野加寿子	前NHK放送博物館館長，プロデューサー，放送ジャーナリスト
	河合祥一郎	東京大学教授		池端俊策	脚本家
	酒井誠	川崎市アートセンター演劇ディレクター，武蔵野音楽大学講師		音好宏	上智大学教授
	永井多恵子	せたがや文化財団理事長，社団法人国際演劇協会会長		杉田成道	日本映画衛星放送（株）代表取締役社長
	西哲生	能楽評論家		橋本佳子	プロデューサー
	宮辻政夫	演劇評論家		林真理子	作家
	村上湛	明星大学教授		八木康夫	TBSテレビ取締役プロデューサー
映画	安藤紘平	映画作家，早稲田大学教授	大衆芸能	相羽秋夫	演芸評論家
	掛尾良夫	キネマ旬報社顧問，城西国際大学メディア学部教授		小倉エージ	音楽評論家
	北川れい子	映画評論家		中村真規	演芸プロデューサー
	滝田洋二郎	映画監督		花井伸夫	演芸評論家
	種田陽平	美術監督（映画）		松尾美矢子	演芸ライター
	野村正昭	映画評論家		悠雅彦	淑徳大学公開講座講師
	宮澤誠一	日本大学芸術学部教授		渡辺寧久	演芸コラムニスト
音楽	加納マリ	武蔵野音楽大学講師	芸術振興	伊藤裕夫	静岡文化芸術大学文化政策学部非常勤講師
	白石美雪	武蔵野美術大学教授		木下直之	東京大学教授
	谷垣内和子	（公社）日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画制作課長		佐藤信	座・高円寺芸術監督，劇作家，演出家
	長木誠司	東京大学教授		柴田英杞	公益財団法人滋賀県文化振興事業団理事兼芸術監督
	根岸一美	同志社大学文学部任期付教授		長田謙一	名古屋芸術大学教授
	野川美穂子	東京芸術大学講師		根木昭	昭和音楽大学教授
	堀内修	音楽評論家		野平一郎	東京芸術大学教授
舞踊	尼ヶ崎彬	学習院女子大学教授	評論等	井上章一	国際日本文化研究センター教授
	池野惠	舞踊批評家		尾形敏朗	映画評論家
	稲田奈緒美	舞踊評論家，昭和音楽大学バレエ研究所特任准教授		田中優子	法政大学教授
	織田紘二	独立行政法人日本芸術文化振興会顧問		樋口隆一	明治学院大学教授
	篠原聖一	公益社団法人日本バレエ協会　業務執行常務理事		三浦篤	東京大学大学院総合文化研究科教授
	西村彰朗	演劇評論家		三浦雅士	文芸評論家
	平野英俊	舞踊評論家		水落潔	演劇評論家
文学	川上弘美	文筆業	メディア芸術	久保雅一	小学館マルチメディア局チーフプロデューサー
	佐佐木幸綱	歌人		里中満智子	漫画家
	篠田節子	小説家		関口敦仁	美術作家，愛知県立芸術大学教授
	高橋一清	一般社団法人松江観光協会観光文化プロデューサー		為ヶ谷秀一	女子美術大学大学院教授
	高橋順子	文筆業		中谷日出	NHK解説委員
	沼野充義	東京大学大学院人文社会系研究科教授		細萱敦	東京工芸大学教授
	正木ゆう子	俳人		横田正夫	日本大学教授
美術	榎本徹	岐阜県現代陶芸美術館長			
	金子隆一	東京都写真美術館専門調査員			
	小池一子	武蔵野美術大学名誉教授，株式会社キチン代表取締役			
	島谷弘幸	東京国立博物館副館長			
	白石和己	山梨県立美術館長			
	深澤直人	プロダクトデザイナー			
	藤森照信	東京大学名誉教授，工学院大学教授			
	松本透	東京国立近代美術館副館長			
	山脇佐江子	神戸大学文学部・金城学院大学非常勤講師			
	横山勝彦	長野県信濃美術館副館長兼学芸課長			

※敬称略・部門内50音順

平成25年度（第64回）芸術選奨委員一覧【推薦委員】

部門	氏名	肩書	部門	氏名	肩書
演劇	猪又宏治	（独）日本芸術文化振興会国立能楽堂部企画制作課長	美術	秋山孝	多摩美術大学教授
	太田耕人	京都教育大学 教育学部英文学科　教授		井出洋一郎	府中市美術館長
	小玉祥子	毎日新聞社学芸部編集委員		植松由佳	国立国際美術館主任研究員
	塩崎淳一郎	読売新聞東京本社文化部記者		太田垣實	美術評論家
	七字英輔	演劇評論家		川浪千鶴	高知県立美術館企画監兼学芸課長兼石元泰博フォトセンター長
	高橋敏夫	早稲田大学大学院文学部教授，文芸評論家		楠見清	首都大学東京システムデザイン学部准教授
	立花恵子	演劇評論家		蔵屋美香	東京国立近代美術館美術課長
	伊達なつめ	演劇ジャーナリスト		小泉晋弥	茨城大学教育学部教授
	萩尾瞳	映画・演劇評論家		清水美三子	女子美術大学教授
	長谷部浩	演劇評論家，東京芸術大学教授		須藤玲子	東京造形大学教授
映画	明智恵子	キネマ旬報編集長		外舘和子	美術評論家，愛知県立芸術大学非常勤講師
	梅津文	GEM Partners株式会社代表		内藤廣	建築家，東京大学名誉教授
	大高宏雄	映画ジャーナリスト		中ハシ克シゲ	京都市立芸術大学美術学部教授
	近藤孝	読売新聞東京本社文化部記者		林洋子	京都造形芸術大学准教授
	坂野ゆか	（公財）川喜多記念映画文化財団チーフコーディネーター		水野学	good design company 代表
	関口裕子	（株）アヴァンティ・プラス代表取締役		三田村有純	東京芸術大学学長特命美術学部教授
	中嶋清美	（公社）映像文化製作者連盟事務局長		山本直彰	武蔵野美術大学特任教授
	樋野香織	神戸アートビレッジセンター	放送	石井彰	放送作家
	森脇清隆	京都府京都文化博物館学芸課映像・情報室長		岡室美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長， 早稲田大学文学学術院教授
	山名泉	すかがわ国際短編映画祭実行委員， 高島平ドキュメンタリー映画を見る会主宰		加賀美幸子	千葉市男女共同参画センター名誉館長
音楽	礒山雅	国立音楽大学招聘教授，大阪音楽大学客員教授		雑崎徹	朝日新聞東京本社文化くらし報道部文化担当部長
	伊東信宏	大阪大学大学院教授		鈴木嘉一	ジャーナリスト，放送評論家
	岡部真一郎	明治学院大学教授		中町綾子	日本大学芸術学部教授
	小畑恒夫	昭和音楽大学教授		原田雅昭	編集者
	薦田治子	武蔵野音楽大学教授		藤田真文	法政大学社会学部教授
	下野竜也	読売日本交響楽団首席客演指揮者		古崎康成	テレビドラマ研究家
	竹内有一	京都市立芸術大学准教授		森治美	脚本家
	塚原康子	東京芸術大学音楽学部楽理科教授	大衆芸能	今岡謙太郎	武蔵野美術大学教授
	沼野雄司	桐朋学園大学音楽学部准教授		大友浩	演芸研究家，文筆家
	山川直治	邦楽研究家		荻田清	梅花女子大学教授
舞踊	阿部さとみ	舞踊評論家		金森三夫	フリーライター
	上野房子	ダンス評論家，明治大学・明治学院大学非常勤講師		佐藤友美	東京かわら版編集長
	海野敏	東洋大学教授		関谷元子	音楽評論家
	新藤弘子	舞踊評論家		萩原健太	音楽評論家
	鈴木英一	早稲田大学演劇博物館招聘研究員		古川綾子	大阪府立上方演芸資料館学芸員，近畿大学非常勤講師
	高畠整子	社団法人当道音楽会常務理事		村井康司	音楽評論家，尚美学園大学講師
	中川俊宏	武蔵野音楽大学教授		油井雅和	毎日新聞社記者
	長野由紀	舞踊評論家	メディア芸術	小野憲史	ゲームジャーナリスト
	坂東亜矢子	演劇評論家		金澤韻	キュレーター
	守山実花	首都大学非常勤講師，バレエ評論家		神谷英樹	ゲームデザイナー
文学	小池光	仙台文学館館長		小出正志	東京造形大学教授，日本アニメーション学会会長
	紅野謙介	日本大学文理学部教授		鈴木芳雄	愛知県立芸術大学客員教授
	三枝昂之	歌人，山梨県立文学館館長		田中秀幸	㈱フレイムグラフィックス　代表取締役
	齋藤恵美子	詩人		八谷和彦	東京芸術大学先端芸術表現科准教授
	鈴木貞美	国際日本文化研究センター名誉教授		氷川竜介	文筆業，アニメ評論家
	辻原登	小説家		森山朋絵	東京都現代美術館事業推進科企画係主任学芸員
	十重田裕一	早稲田大学文学学術院教授		吉村和真	京都精華大学マンガ学部教授， 京都国際マンガミュージアム研究センター長
	長谷川櫂	俳人			
	宮部みゆき	小説家			
	宮本輝	小説家			

※敬称略・部門内50音順